

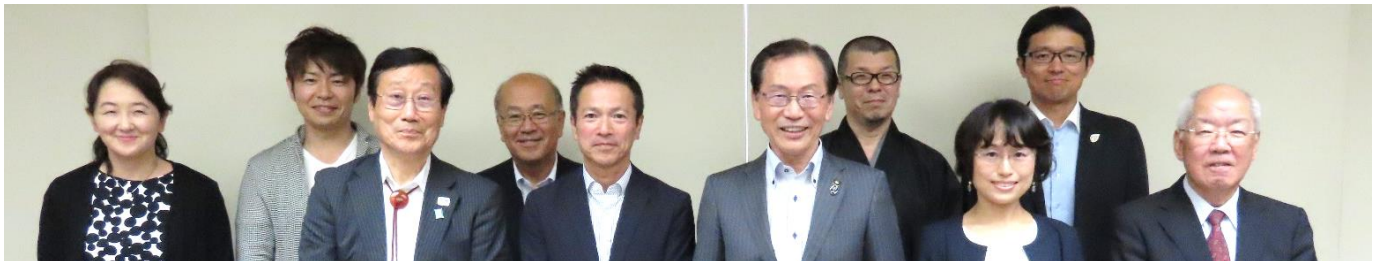


第6回 創生会議 「ふくろい部会」

日：令和元年7月8日
場：袋井市役所4階「庁議室」

次のまちづくりのキーワードは…

「共感」と「挑戦する人を応援する環境づくり」

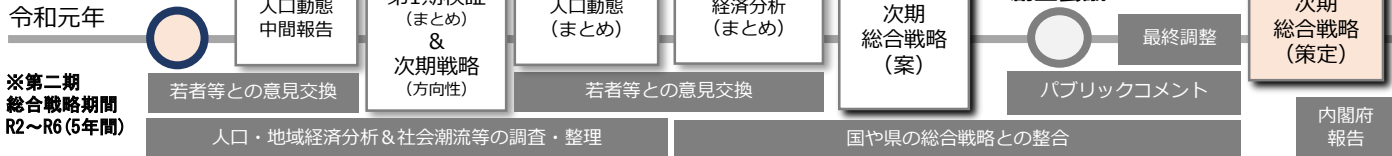


輝く“ふくろい”まち・ひと・しごと創生会議 [ふくろい部会] メンバー

株式会社杏林堂薬局	代表取締役	青田 英行	袋井市観光協会	会 長	谷 敦
Realabo (食と子育てを楽しむサークル)	代 表	足立 美和	袋井商工会議所	顧 問	豊田 富士雄
宗教法人法多山尊永寺	住 職	大谷 純應	静岡産業大学 経営学部	学 部 長	丹羽 由一
日本貿易振興機構 (JETRO浜松)	所 長	志 牟田 剛	静岡理工科大学	学 長	野 口 博
株式会社THE BLUE OCEAN	代表取締役	竹原 興紀	学校法人山名学園 山名幼稚園	理 事 長	諸井 理恵

- この街の暮らしやすさと魅力は「ゆったり感」と「普段の暮らしにおける不便が少ないこと」(例) 静かな住環境で、職住も近接し、交通渋滞はなく、普段の買い物などは車で15分以内でなんとかなるまち
- 教育や子育て、農業や観光分野など、これまでにない取組に挑戦してきたことは評価すべき。ICTなど新技術活用は、地方での生活や仕事を豊かで快適にする。今後も積極的に活用を…。
- 女性のほか、高齢者や外国人市民の活躍を支える環境づくりは、まだ道半ば。多様な人や企業をまちづくりに参画させるには、「共感する物語」と気軽な「場づくり」が大事。

戦略策定スケジュール 創生会議



※第二期 総合戦略期間 R2～R6 (5年間)

1 人を惹きつける“コト”づくり

- ▶ 「風鈴まつり」や「夜宵プロジェクト」は、客入りの少ない時期や日頃訪れる機会のない場所へ人を誘う仕掛けとして好評だった。また、インスタ映えなど、SNSにおける拡散を意識した戦略性も観光振興策に新たな息吹を吹き込んだと思う。
- ▶ 昨今の観光は、世界遺産のような「モノ」が無くとも、その場所にしかない「コト」に人は魅力を感じる時代になった。
- ▶ 袋井のモノやコトを「繋ぐもの」は何か、例えば「月」。メロンの満月パッケージや法多山で満月の日に行うヨガ教室など既存のモノやコトに新たなコンセプトで付加価値を付ける。
- ▶ 再三、同じ店に通うリピーターは、「おもてなし」や「ヒト」の良さをその理由に挙げる人が多い。まさに「ヒト」は観光資源。袋井商業高校でおもてなしのプロが育ち、地域で働くことは、人を惹きつける地域づくりの担い手としても期待できる。
- ▶ インターネットで大半のものが手に入る時代。ドラッグストアでいえば、生鮮食品や処方箋対応などリアルな店舗でしか扱えないモノを増やすことで、ネットに対する対抗力をつけている。
- ▶ 世界規模のアーティストがエコパを利用している。この集客機会を市のPRや地域活力の向上に活かしていくべき。

2 これからの地域社会のカタチ

- ▶ 袋井では第3次産業への就業比率は低い。今後、サービス産業が伸びる余地がある。一方、地域の基幹産業である製造業等の分野では後継者不在や人手不足などを理由に廃業が増えている。
- ▶ 核家族や独居老人も増えている今、暮らしやすいまちづくりには、多世代が互いに支え合う関係をどのように築いていくかは避けられない地域課題。コミュニティセンターへの期待は大きい。
- ▶ デジタル社会が急速に進展する時代だからこそ、今この地にある「ゆったり感」は大切。自分たちで「ありたき街の姿」を思い描き共有することが、まちが輝き続ける第一歩。
- ▶ どもんなか袋井まちづくり株式会社では、2020年のホテル開業を起爆剤にし、中心市街地の活性化に注力したい。ソーシャルビジネスや廃業問題などの経営相談にも幅広く応じていきたい。
- ▶ 市職員こそ「副業」を認めて、地域社会で活躍してほしい。大学との連携やベンチャー企業の立ち上げなど、イノベーションを起こす多様な働き方で地域全体の生産性を上げることが必要。
- ▶ 「挑戦する人を応援する風土」は、若者やイノベーター、先進企業が集まることにつながる。エコパでの自動運転等の未来技術を身近に体験できる取組は、引き続き進めてほしい。



3 女性のチカラを地域の活力へ

- ▶ 自分の友人や知人には、子どもを3~4人産んでいる人が多い。袋井は子育てしやすいと感じているが、「働き続けるか」「子育てに専念するか」は悩む人が多いと思う。何に障壁を感じるか調べることで、より良い街をつくっていきけるのではないかと。
- ▶ 進学などで首都圏に転出した若者が、地元に戻ってくる割合は、男性よりも女性の方が低い。それはこの地域に若い女性が魅力を感じる仕事（サービス産業が少ない）や活躍機会、居心地の良い場所が少ないことが要因だと思う。
- ▶ 袋井は普段、暮らしやすい街ではあるが、女性やよそ者が自分で「何か新しいことをやろう」とする人にはハードルが高い。浜松や磐田には、何かをやる・やりたいと思う人が気軽に集まり、相談できる場所があり、新たなことを学べる場もある。
- ▶ 成功している農業法人の多くは、女性が経営に参画している。経理や宣伝、販売等に女性の視点を取り入れることが大事。全国的にも女性農業者が大変増えており、各地で活躍している。

4 若者に選ばれるまちへ

- ▶ 性別や学歴、国籍など関係なく、多様な人が活躍する土壌（地域）づくりがイノベーションの源泉となる。
- ▶ 若者の意識が変化している。「自分は地方で頑張ろう」という人が増えている。クリエイティブ人材を地元で育て、また全国から集めるためにも、袋井の暮らしやすさをもっとPRすべき。
- ▶ 地方での暮らしは、イメージが先行し避けられている可能性がある。「若者のライフスタイルに対する価値観」に視点を置き、若者は何を求めて東京に行き、何がネックで地元に戻らないのかを調べてみることで、なにか見えるものがあるのではないかと。
- ▶ 静岡理工科大は、地域に根差した大学として建築学部に次ぐ、新たな学部の新設等に向け、学校改革に励んでいる。これとあわせ、ここで育った人材が地域で活躍できる環境づくりも大事。
- ▶ 次期戦略では、「〇〇のために〇〇を実現させたい」という取組のねらいをストーリーで語るPRも大事。物語は、共感を呼び、サポーターを増やす「巻き込むチカラ」がある。小さく生んで、多くの人の関わりを得ながらみんなで育てる視点が重要。



総合戦略について意見を交わす委員ら
—袋井市役所

袋井市は9日夜、輝市町への転出超過が続く「ふくろい」まち・しごと創生会議を市役所で開いた。市魅力を感じるような市内の各種団体や企業などから9人の委員が参加して2018年度の第1期総合戦略の検証と第2期の策定に向けた意見を交わした。

市側が外国人の転入者の増加により市内の人口が増えているが、子育て世帯の近隣などを課題として挙げ、

袋井市
創生会議

人手不足や消費流出も

子育て世帯転出議論

については、企業の人手不足問題や市内の民間消費額が市外に流出している点を指摘。委員からは「若い女性が活躍できる仕組みが必要」などと指摘があった。

原田英之市長は「今後の5年間に袋井が向かうべき方向性を定めたい」と話した。

